

「自発性」をめぐる関係性の構築について
- 「プレイバックシアター」実践を通じて -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
各務 勝博

社会福祉援助活動を展開していく為には、信頼関係を援助者と利用者との間に築いていく事が前提となる。社会福祉援助の中における利用者の「主体性」や「自己決定」ということを、「関係性の構築」という視点を持って考えてみたい。主体性や自己決定を重んじるということは、「自発性」をどう引出すかということと密接に関わっている。

マニュアルが優先され、ボランティアの位置付けが意図的に変容させられている現代日本の中で、「自発性」が奪われていく環境が作られてきている。現在、自発性を育てていく手立てが必要となってきたおり、その手法のひとつとして、プレイバックシアターの持つ要素が、重要な役割を果たすことが出来ると思う。

社会福祉援助における利用者の「自己決定」はどのように行われていくのか。それは利用者本人を中心とした家族や援助者、制度や環境などとの関係性の中で行われていくものである。援助者にとっては、利用者との関係性を築いていくことが重要な課題でなってくる。現在、この援助者と利用者との間の関係性の構築については、十分な位置付けがされていない。ケアマネジャーについて述べると、その歴史的背景の中で、「利用者志向」と「システム志向」の両モデルが存在し、現在日本のケアマネジャーは「システム志向」としての役割を担わされており、利用者との間に信頼関係を構築していくための位置付けが十分になされていない。ケアマネジャーが利用者との間に信頼関係を構築していくためには、パートナーシップという考え方が大切である。

プレイバックシアターの持つ、共感・受容・自己覚知などの要素が、自発性を引出す働きをしていること、援助者が利用者の「パートナー」となるために必要を持っている。これらは実際の実践活動の中からも実証されるものである。

援助者が、利用者の自発性促進に支援的に関わる、パートナーシップを身に付けていくためのトレーニングとして、プレイバックシアターを使ったプログラムを提案したい。それは以下のような内容を持つ。

プレイバックシアターを経験することにより、普段は気づいていない、自分自身の中で起こってくる様々なことについて、意識化する機会を得る。そこで起こっている事そのものや、それが導き出されたプロセスについて丁寧に関わることを通じ、自分自身を見つめ直し、援助者として必要な態度を学んでいく。テラ体験やアクター体験を通じては、援助者・被援助者としての自己理解や他者理解、共感的な姿勢を身に付けていく。また、グループ内で表現することを通じ、援助者としての創造性、自発性についても促進させていく。ケアマネジャーが援助者として「必要な社会資源を作り出す」、そのような自発性を持ちえていくことにも、プレイバックシアターを通じて関与していきたいと考えている。